

尾崎恒子「拗ねた水仙」論——横山源之助との出会いとその裏切り

A Study of “Sulked Narcissus” by Ozaki Tsuneko — An encounter and a betrayal involving Yokoyama Gennosuke

黒崎 真美

Mami KUROSAKI

はじめに

尾崎恒子は横山源之助の晩年の恋人といわれた女性である。恒子は「新らしき女」(X生『新らしき女』一九一三・一)の一人として数えられ、雑誌に人となりを紹介され、米騒動など時事に対する意見を求められたこともあった。恒子の生活の基盤である「生花」では、『婦人界』(一九一七・一一、一二、一九一八・一、四、六、一二)に「挿し方」を連載していたり、当時の文化や風俗の最先端の銀座にあるカフェパウリスタで花を活けたりなど、尾崎恒子の名が当時かなり知られていたことは、前号の『星稜論苑』第五十一号(二〇二二・一一)で述べた。

「拗ねた水仙」は一九一七年一〇月の『法治国』に発表された小説である。『法治国』は一九一四年九月に東京法律事務所が発行した『月報』が創刊で、「世間と法律とを大に接近せしめて今少し優

しい円い和かな方面の法律を味ふこと」(東京法律事務所『月報』一九一四・九)を目的として発行されたものである。一九一五年一〇月に『東京法律』、一九一七年四月に『法治国』と改題して、主に法律にまつわる論文や随筆などを掲載するために作られた。その『法治国』に、三十一号(一九一七・五)に舞踏家で社会活動家の日向きむ子が女性として初めて執筆し、三十二号(一九一七・六)に歌人三ヶ島霞子と評論家で婦人運動家の遠藤清子、三十三号(一九一七・七)に美容家で婦人運動家の小口みち子、三十四号(一九一七・九)に歌人と謝野晶子と、名だたる女性たちが執筆し、その次の三十五号(一九一七・一〇)に尾崎恒子が「拗ねた水仙」を掲載した。

源之助の周辺調査の過程で、恒子の人物像が見えてくると、恒子は単なる恋人という存在以上の役割を果たしたのではないかという疑念が起ってくる。ここでは、「拗ねた水仙」に描かれた女性の無

念や心残りと共に恒子と源之助との親交を考察する。また、最後に恒子の小説「拗ねた水仙」を翻刻する。

1、「拗ねた水仙」と恒子

尾崎恒子は、一九一七年一月から翌年一二月にかけて『婦人界』に六回の花の挿し方に関する記述を掲載しているが、冬の花として頻繁に「水仙」が登場する。「細口の花瓶に水仙一本を無造作に挿すなど、いふのが面白い」（一九一七・一一）とか「三日〓梅に水仙：（略）：月形の釣花生に水仙の一二本をつましやかに挿しますなどは趣味の深いもの」（一九一八・一）や「水仙〓は元来、精の強いもの」（同前）、「水仙〓上品な古銅の小形の壺などに殆んど自然のまゝに、三本か五本、不作意に挿す方がよろし」（一九一八・一二）いなどと何度も取り上げていることから、「水仙」は恒子の好んだ花材であったことがわかる。拗ね者と自認する自身を「水仙」になぞらえたのがこの作品のモチーフになっているのではないだろうか。

作中では、「天才肌の彫刻家」^①の父を持つ芳子は何不自由なく暮らしていたが、九歳の夏に起きた火災で生活が一変する。「一年有余の日月と、熱心な心血」を注いで完成させた「八尺余りの天狗の立像」を焼失したために父が精神を錯乱し、「幻に天狗の像の影」

を追いかけて街を彷徨するようになる。「蛍沢あたりの郊外」をさまよって、そのまま「一夜を明し」たこともあった。そして精神病院で八年間の闘病し、ようやく全快して退院した一週間後、心臓麻痺で亡くなってしまふ。その頃芳子は「千駄木町の藪下」に住む一高出の文学士の所へ国語を習いに通っていた。帰りは「太田の原」を通って、「根津権現の境内をぬけて一高の前」まで文学士に送ってもらっていた。

「蛍沢」とは、谷中の菘寺とも呼ばれる宗林寺の辺りを称した名称で、光が強く大きな蛍が飛んでいたという^②。「太田の原」は千駄木町の太田子爵邸の庭の俗称である。芳子の父が「精神乱れて」彷徨し、谷中の宗林寺周辺の「蛍沢」まで行って一夜を明かしたのも、千駄木町の文学士の家からの帰路、「太田の原」や根津権現、第一高等学校（東京大学教養学部の前身）を通って帰宅する経路も、芳子の自宅を本郷森川町と考えると無理がない。一八七九年七月に上野恩賜公園内に東京府癪狂院が開院しており、精神に異常をきたした父の入院先もこの界限を設定したものであると考えられよう。

尾崎恒子についての詳細な経歴は未だ明らかになっていないが、南蛮鐵^③は「本郷通り」の「尾崎といふ仏具屋」が恒子の生家であると記している。X生『新しき女』（一九一三・一 聚精堂）によれば、三十一歳で独身の恒子は「母と下女との三人、本郷森川町一」に住んでいるとある。また、「春木町の彫刻師章運」が父親である

とも記している。「兄弟のうちで一ばん親父に愛まれ、小さい時から、仕事場の木屑をいぢりながら、親父の傍に坐」っていたともあり、幼少期に父が彫刻する傍らで遊んでいた主人公芳子の姿の描写と重なる。

さて、父の死の一年後の三月、芳子は、国語を習いに通っていた文学士で駒込に住む私立大学の講師と婚約するのだが、その年の六月に体調を崩したため「大した程ではない」のに逗子の養神亭に転地療養する。

逗子の養神亭は「来客絶へ間な」(『逗子案内誌』一八九七・八群書城) という高級旅館で、海水浴や療養のために長期滞在する者もいたという。父の死後も国語を習いに文学士のもとに通ったり、「軽い咳」程度の病状で療養のために逗子の高級旅館に滞在したり、父が亡くなっても芳子は経済的にかなり余裕があったと考えられる。

養神亭の芳子のもとに、婚約者は毎週日曜に見舞いに訪ねてきたが、あるとき土曜の午後に訪ねて来た。養神亭に泊ったその夜半、芳子が目を覚ますと別室に宿泊したはずの婚約者が枕元に座っていた。婚約者は人が違ったように、目を血走らせて蒼ざめて何かを囁いた。芳子が恐怖のために声を上げて泣いたら、婚約者は翌早朝に東京へ帰り、それきり訪ねて来なかった。一月後、芳子の友人の姉静子と関係を持った婚約者は、芳子との婚約を破棄して、静子を伴

って「支那の某学堂」へ転任した。

婚約者が宿泊した晩、具体的に何があったのか詳細には語られない。しかし、目を血走らせ、顔を真蒼にした婚約者の様子からは、唐突に芳子に肉體關係を迫ったものと考えられないだろうか。婚約者にも切羽詰まった理由があったのかもしれないが、事情の説明は全く語られず、婚約者は帰京後すぐに静子と「他人ならぬ御交り」を結ぶ。そして芳子と婚約破棄した後、静子を伴って「支那の某学堂」へ転任してしまうのである。

日清戦争後、日本は国外の複数の地を統治しており、当時の中国の一部地域もその一つであった。一九一七年三月の『教育年鑑』(富山房)には次のようにある。

関東州に於ける支那人教育の端緒は小学校設立以前に在り。明治三十七年五月金州軍政署の編成せらるゝや、当時の軍政官は金州地方の有志と相謀り、学堂を設立し、同年十二月城内の子弟五十八名を入学せしめ漢文科の教授を開始せり、之を本州に於ける支那人教育の濫觴とす。

統治下の関東州に、大正四(一九一五)年には規則や組織が整備され、高等教育機関も設置された。大正五年度の記録によると、関東州・満鉄沿線に学堂は一・二六校が数えられている。ここに芳子の婚約者は赴任が決まっていたと推測される。もちろん多くの中国に関する記事や論文などの情報は統治以前からあったが、明治十八

(一八八五)年から発行されていた『東京学士会院雑誌』には「支那人肉ヲ食フ」(発行年月不明)や、明治二十五(一八九二)年五月創刊の『東邦協会報告』の「支那人」ではその特徴を「粗野」「粗食」「我欲」と評している。一九一六年になっても大隈重信は「支那人は猶ほ鬼神説の信者のみ」(『日支民族性論 後編』一九一五・七 公民同盟出版部)と、当時の中国は旧態依然の文化であると記述している。実際がどうであれ社会の認識がそうであるならば「支那の某学堂」への赴任には相当の覚悟が必要になるだろう。お嬢様育ちの芳子が妻として共に行くことは難しい選択だと容易に推測される。婚約者のその焦りが、いつもと違う恐ろしい姿を芳子にさらすことになったのではないか。そんな婚約者の心情を押し量ることができないほど幼い芳子には、婚約者との別れが必然であった。

別れてから十七年後、かつての婚約者から手紙が届く。静子と死別、二度目の妻とは生別して、独身になった元婚約者は芳子と逢いたいという。芳子が三十幾才まで独身だったのは「其の人が恋しいから」だったのだが、別離後様々な経験をした「其の人」は当時とは違うはずで、「幻の思い出」との「懸隔」が大きいことが予想される。「逢ふのも惜しい。逢はぬのも寂しい」ので、ひたすらに「迷つてゐる」と結ぶ。

元婚約者「駒込の人」との恋ともいえないような淡い「思ひ出」のために、芳子は半生を無為に過ごし、「有髪尼生活」を送ること

になった。かつての優しかった「其の人」のことを十七年間忘れず、独身を通して生涯が悲惨なものになったというのだ。少女期に父を亡くし、恋人にも裏切られた一途な女の悲恋の物語であるが、一方で無知ゆえの行動によって十七年間を無為に過ごした「拗ね者」の後悔や自嘲も描かれているといえよう。

2、恒子の恋

南蛮鐵は「二十六七の娉婷たる娘」^④の恒子が「此の歳にして夫を迎へず、嫁らず」なのは「何かの事情が伏在してゐなければならぬ」と、好奇心丸出しでその理由を詮索していく。

◎然し、此の金光仏彩の裡に、十六の齡を重ねるまでは、つね子も人並の娘であった。或る春の日暮前、長い法衣の袖を手繰りながら、此の店頭を訪れた青道心があつた。其後四五日経つてから、注文のものを受取りに来たきり、再び姿を見せなかつた。

◎此の心情きまでに、いたくしい若い僧は、僅か二度の訪れに、どうした拍子か、あやしくつね子の心を狂はしめた。昔は、チラと宵闇に見染めた紫の振袖に、情深い娘の心は燃えて、江戸の大火となつたといふ物語を残してゐるが、こゝには浦若き法衣姿の美少年が、心弱いつね子をして、永く世の拗ね者たら

しめて了つた。

◎つね子が、今世にすねてゐるのはこの若い僧形をした幻の爲めである云はゞ、現世には遠い神秘的の物語でも読むやうな、又しほらしい悲しい話である。

〔毛色の変つた女(六) 本郷の狸娘尾崎つね子〕

つまり、十六歳の春、父の店に訪れた若い法衣姿の美しい「青道心」が「つね子の心を狂はし」たために、二十六歳まで独身を通し、「拗ね者たらしめて了つた」のだと結論付けている。一八八一年に生れた恒子は、一九一一年には数えて三十一歳である。恒子の年齢を二十六、七歳としたこの記事の信憑性は疑われる。しかし、恒子の狸趣味は『新真婦人』(一九一四・三「第三回蛙聲会の記」)でも確認でき、「松栄斎理育と号して、生花のお師匠さん」(「毛色の変つた女(六) 本郷の狸娘尾崎つね子」)であったことは『婦人界』(一九一八・四「四季折々の花を命に」)にも記されていることから、全くのでたらめと断ずることはできない。「十年前の物語」として十六歳から二十一歳頃の恒子に法衣姿の青年に恋をしたという物語があつた可能性がないとは言えない。恋心を胸に秘め、一途に一人の青年を思つて「拗ね者」になつた愚かさへの自戒は「拗ねた水仙」の芳子に通じる。

黒百合女史「現代新進女傑月旦 尾崎恒子女史」(『一大帝国』一九一六・九)では、

今から十年余も前の事此人には思ひ思はれた恋人があつた、ふとした男のホンの発作的一時的の感情のさせた事ではあるが、恒子さんの女の友人が恒子さんの恋人の子供を生み落した、恋人と友人とは恒子さんに顔向けにならない結婚をして終つた、それつ切り恒子さんは恋もしない結婚もしない独身で通して終つた何と云ふ、真面目な、熱のある、執拗な、恋情であつたらう、狸趣味に走つた恒子さんの心の底には熱い火が燃えてく燃え熾つて居つたのであつた、恋仇に対して恒子さんはいつも姉のやうな態度をもつて裏切つた男にも真身の同胞にも出来ないやうに真心から出来る限り力を相応にもよく尽したものであつた、其分量をこゝで書き列べる事は出来ない、今恒子さんは父にも母にも死に別れた孤児を自分の子として引き取つて育て、居る、それは恒子さんに失恋の涙を長い年月のあいだ雨とそゝがせた紀念の子供である、ざらにある女には到底出来ない、男にもとても真似の出来ない偉らい女の好標本である、人情を解しない石の塊のやうな鐵の屑のやうな女ではない、火のやうな熱、煮え立つた湯のやうな血、真紅にもゆる唐紅の心の道を、狸趣味の衣で冷く包んだ恒子さんは、理の人情の人として殆んど典型に近い

黒百合女史は、恒子が裏切つた恋人の子どもを「自分の子として引き取つて育て、居る」ことについて、そのいきさつを記している。

この時三十六歳の恒子が、十数年前の恋人で、恒子を裏切った人の子を育てているというのだ。源之助の娘梢を引き取って養女にしたのは源之助の没後の一九一五年六月三日以降で、恒子が三十五歳の時である。

恒子は「裏切った男」の遺児を我が子のように育て、生涯を共に過ごした。その内心は裏切った恋人への愛情や怒りや嫉妬や諦念のために煩悶していたに違いない。「拗ねた水仙」の芳子の嘆きは、恒子が源之助に告げることができなかった恨みの言葉なのではないだろうか。どんなに恨んでも源之助の最期の願いを聞き入れたのは、源之助との深い信頼関係によるものだ。それは長い時を経て二人に結ばれた関係性であるに違いない。

3、上京後の源之助と恒子

一八八六年二月、横山源之助はせっかく第一期生として入学した富山県中学を一年も経ずに退学し、二人の友人岩崎文次郎、大島茂と上京した。黒田源太郎によれば^⑤、友人二人は「海軍兵学校に入るべく」、源之助は「弁護士たらんと」現在の中央大学の前身である英吉利法学校に通って法学士を目指した。しかし、弁護士試験には「此年も翌年も翌々年も」失敗し、谷中初音町の下宿近くに住む川島浪速や二葉亭四迷と交流することによって、文筆で身を立てる

ことにする。源之助は一八九四年九月に処女小説「貧しき小学生徒」（『家庭雑誌』）を発表し、十二月から一八九九年一月まで横浜毎日新聞社で記者をした。十六歳の恒子が若い僧によって「心を狂は」されたという南伴鐵の記述^⑥が正しいなら、一八九八年に横浜毎日新聞で記者をしていた源之助は、十六歳の恒子が恋をした「若い僧」ではない。しかし一九九四年以前の「放浪時代」^⑦であれば、寺院の離れに下宿していたこともある源之助が、住職に頼まれて仏具屋まで使いに行くということもあつたかもしれない。

一九〇四年八月に、松島やいは旅館業茶屋勘の跡取り息子板井文治との子正儀を金沢で出産し、魚津を追われて同郷の法学博士黒田源太郎を頼って上京^⑧、やはり同郷の源之助は黒田と交流する中でやいを知り、養母すいの姻戚の娘ともされる^⑨やいを引き取るようになった。

黒百合女史によれば、恒子が「思ひ思はれた」恋人に裏切られたのが十数年前であるというから、二人は一九〇五年前後に恋人だったと考えることができる。立花雄一は『横山源之助伝——下層社会からの叫び声』の中で、二人の関係は「明治末年頃から」始まったとし、「明治の硬骨の女傑木村貞子が経営する梅香女塾がその頃本郷林町にあった。そこへ横山源之助が伊尾準等とともによく出入りしていたという。尾崎恒子は梅香女塾で盆石と生花の先生をしていた」^⑩ことがきっかけで、二人が知りあつたと記している。つまり一

九〇八年に源之助とやいの長女梢が誕生しているので、立花によると明治末年にはやいと内妻関係にあった中での恒子との交際ということになる。

一九〇五年一月に源之助は「日本婦人の貞操の程度（離婚―姦通―私生児―墮胎）」（『商業界』）を發表している。ここでは、当時「社会主義者」が説く「自由恋愛説」に一石を投じ、「今日の夫婦関係」の実態を示した。離婚率の高さやその理由のデータを示し、裁判になった「姦通事件」からだけでも「夫婦関係の甚だ不完全」であることが明白だと論じている。さらに源之助は私生児や墮胎の問題にも言及する。「青年男女が情慾の儘に因果の種を作りて、之を隠蔽し、或は境遇の強ゆる所と為りて何等の介意なく平然として、墮胎を敢てする者多し、是れ知識の到らざる下層社会の事実に属す」と、教育のない下層民が「情慾の儘に因果の種を作り、墮胎や私生児、姦通、離婚をする悲劇を指摘し、これは「国家の不幸」と嘆く。この嘆きは松島やいと板井文治の悲劇に対するものでもあったのではないだろうか。このような記事を書いた源之助が、同時に恒子とやいの二人の女性と交際するとは考えにくい。黒百合女史が記したように、恒子と交際の源之助が「発作的・一時的の感情」のためにやいと関係し、梢を身ごもったのではないだろうか。やいが妊娠したために恒子との関係を解消し、源之助が魚津の松島家に結婚の許しを請いに訪ねたのではないか。しかし松島家に認められなかったた

め^⑩に、やいは源之助と結婚することなく、内妻として源之助の二人の子の母になった。

「情慾の儘に」関係を結んで墮胎や私生児の誕生を問題視した源之助であったが、結果的にやいの三人の子である正儀・梢・博太郎を私生児にしてしまうことになった。養父母や義弟妹の生活を引き受けて、経済的に苦しい中で満足に育てられない正儀を東京生育園に預けたのは、実は源之助の愛情ではなかったか。正儀は施設で生活する中で多くを学び、長じて「社会福祉の実践家」^⑪として大成する。また、源之助がブラジルに渡航した際には梢に宛てて何通も葉書を送り、帰国前には「梢ちゃんにミヤゲ買ッテクル」（一九二二・一二・六日付）と書くなど、葉書には娘に対する愛情に溢れている。その愛する娘梢の生育や教育を任せるのは、実母のやいではなく恒子であった。「臨終の二、三日前、横山源之助は、梅香女塾の木村貞子に立ち合ってもらい、尾崎恒子に梢を託すことを遺言した」（『横山源之助伝——下層社会からの叫び声』）のは、恒子が手に職を持つ経済的に自立した教養ある女性であり、源之助が最も信頼した女性であったからに相違ない。源之助が亡き後の梢を恒子に託したのは、娘の将来を気遣った結果である。このような子どもたちへの責任感や愛情からは、源之助に二人の女性と同時に交際するような不誠実さは感じられない。

一九一五年六月三日の源之助の臨終の様子を偶然立ち合うことに

なった中村武羅夫が『明治大正の文学者』（一九四九・六 留女書房）に、次のように書いている。

私は、偶然の縁故から、源之助の臨終に立ち合つたが、妻子もあり、家庭も持つてゐたのだが、自分はその時人の家の二階借りをしてゐて、そこで息を引き取つた。

中村は「人の家」がどこであるのかは明示していない。しかし、恒子が書いた「婚約」（『新真婦人』一九一五・七）には、恋人を看取つた女の悲しみと決意が描かれており、これをみても源之助が最期を恒子と共に過ごしたことが容易に推測できる。裏切りの後に戻つた源之助を経済的に援助し、最期を共に過ごした恒子は、源之助にとつて最も信頼のおける最愛の女性だったのである。

4、翻刻「拗ねた水仙」

拗ねた水仙

尾崎恒子

私は寒い木枯しの中に育つた水仙花。すねた女とお笑ひ下さいますな。水仙の葉は拗ね、花はうつむいて咲きますけれど、あれは水仙の性質ではございません。温かい情けの人の手に、風を厭つて、そつくりと、優しく育てますと、彼の水仙の葉も素直に花も自然に上を仰いで咲くのでございます、けれど不憫や木枯しの寒い野原に

生を稟けたる可憐の運命！ 私は寒い木枯の風に拗ねたるのは水仙花、只ホロ／＼と散るを生命の罌粟の花のやうに、最初から横を向く性質を持つて生れたものではございませんの。

一、思ひ出

さなきだに寝ざめがちな此の夜頃、庵の少庭の小萩がくれに、狸燈籠の灯も淡き小夜更けて、ひとり人なき、椽の柱に身をよせて、隣家の軒の松虫の声など聞いて居りますと、三十余年の妾の過去半生の物語りは、夢の様に、幻の様に、或は色濃く或は又うすらぼんやりと、霧をへだて、見るなつかしの人の面影の様に、淡きながらも私の心を掻き乱すのでございます。

二、呪ひの天狗

天才肌の彫刻家の一人娘と生れた私は、父の大事な愛娘として、孤独な父の友として、此の上もないたつた一人の慰藉者であつて、父の彫刻の傍に小さい鑿をいぢつたり、小刀を研ぐ真似をしたりして、大きくなつたのでございます。九才の夏までは何事もなく、ふくよかに、のんびりとした、おとなしい良い子であつたのださうでございませう。一夜近火のために父は家邸、家財家宝は申すまでもなく、一年有余の日月と、熱心な心血をそ、いで漸つと彫り上げて、まだ布も除かぬ八尺余りの天狗の立像を渦巻く一陣の火炎の中に、

見事、灰と化してしまつてから俄かに精神乱れて、あらぬ事のみ口走る様になりましたのです。或時は幻に天狗の像の影を追うて、一人こつそり家をぬけ出て、街から街をさまよひぬけて、螢沢あたりの郊外に当度もなくたどり行き、遂に疲れて其のまゝ、其処に打ち臥して夜露にぬれて一夜を明し、或時は又天狗の在所をたゞす為めとて時の大臣邸に刺を通じて警衛の士にあやしまれたり、斯くして恥かしい幾日を過して後遂に、病院の一室に、妻と離れ子と分れて一人起居する事となりました——前後八年間——私は一人母の許に、狂ふた父の身の上を案じ暮して涙乾かぬ朝夕を送りました。父は如何に私を恋ひ煩ひました事やら、偶々面会に行きます私を自分の膝に引きよせて、物をも言ひ得ず只ハラ／＼と涙を流すのが常でした。凡ての事には理解を失ひ、二タ言目には、天狗の在所のみ氣遣つてゐる狂ひの父も、我が児への情のみは少しも狂わなかつたのでございませうか？私は後年、愛人の情を失つて後初めて親子の情の尊さを沁み／＼と身に味ひました。

私の父は斯くして八年間を一人淋しい病窓に送り漸く全快して退院致しました一週間目——丁度霽の降る寒い夜更けに心臓麻痺して、医師の来るのも待たないで、私を残して一人墓中に入る身となつてしまつたのでございます。

三、駒込の人

父の死後一年の後、初めて起りましたのが時ならぬ私の夫さだめ、それは赤門出の文学士で某私立大学の講師でした。其の当時私は其の人の許に国語を教はりに通つてゐたのでしたが、それは／＼優しい心切の良い人でした。兼好法師と云ふ坊さんの偉い人物である事も、紫式部の人格も、私は皆な其の人を通じて初めて知つたのです。父を失ひ、はうかうもなく、寂しい身の上の私は、其の人を兄様の様に父様の様に、なつかしみ親しみました。時雨の降る秋の夕暮などは、あの寂しい太田の原の裏通りを一人帰へすのは心許ないとて、自分で傘をさしかけてあの千駄木町の藪下から、根津権現の境内をぬけて一高の前あたりまで送つてくれるのが常でした。其の人と私の家との間を或る一人の人が三四回行つたり来たりしてゐる中に、翌年の弥生を期して、其の人は私の良人たるべく、私は其の人の家庭の女たるべく、約束は結ばれたのでございます。

すでに許嫁の仲とは云ひながら、まだ恋知らぬ少女の私は心に何を考へるでもなく、今まで通りに相変らず、土曜日の午後には、矢絰の振りの袂に、つれ／＼草や、方丈記の布紗包を抱へて駒込通ひをつゞけて居りました。

四、濱ずまゐ

時は丁度其の年は六月、忘れもせぬ梔子の花の白く咲く頃から私は軽い咳をする様になりましたのです。大した程ではないが大切な身体、早い中に養生してとて、私は返子に転地する事となりました。あゝあの時に、私は死んでしまつたなら如何に幸福でありましたか。なまなか、全快で斯うして長らへてゐるのが却つて愁らしい……。

日曜毎には、白いリボンや私の好きな水菓子などを持つて其の人は必ず訪ねて来てくれるのでした。私の一生涯を通じて其の当時こそ実に幸福な時であつたのです。濱の松風よせては返す浪打ち際に、砂山に、二人は並んで腰かけて、遙かにかすむ箱根連山、富士の翠巒を望んで二人は何を囁きましたか……あゝそれも十七年の昔の夢。

五、養神亭の一夜

いつもは日帰りに来る其の人が、初めて土曜の午後から訪ねられて、一夜を私の宿に泊りました。

返子養神亭の奥の一室―蘭燈ほの暗らき夜半、私は悪夢に覚されて、不図眼を開くと別室に寝てゐる筈の其の人が、不思議や私の枕許に座つて、私の寐顔をジツと見つめてゐたのです。オヤもう夜

が明けたのか、と思つて私は急いで起上ろうと致しますと、其の人は俄然○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○何事かを囁きました。其の時の其の人は眼の血走り顔は真蒼で、私の好きな、あの優しいく其の人の面影ではなかつたのです。私は物の怪にでもおそはれた様に、只恐ろしくて怖しくて思はず声を上げて泣いてく其の人を困らせたのです。

翌朝一番汽車で其の人は東京へ帰つてしまいましたそしてそれぎり訪ねて来てはくれませんでした。

一ヶ月の後、私の耳へ不思議な事実が伝えられました。それは其の人が帰京ると間もなく、私の友達の姉さんと、静子さんと云ふ御縁がへりの人と、私の許嫁の其の人とは他人ならぬ御交りが結ばれて……との事でした。其の中に静子さんは其の人と、どうしても夫婦にならねばならぬ、私に申訳のないお身体になつてしまつたのです。

而して兎も角も其の年の暮には、私は何の約束もなかつた昔の娘にかへり、其の人は静子さんを携へて支那の某学堂へ転任して行かれました。

六、有髪の子

私は其のひと、そう云ふ別れをしてから後、初めて恋てふものを知つたのでした。其の当時の自分の心は思ひ出すのも腹立しいので

す。養神亭の夜の一幕が斯う云ふ不思議な結果を胎うとは……少女の私は知りませんでした。

其の後、昔恋しい其の人を想ふ心は日に増し深くなりまさり十七年後の今日まで私は其の人の事が忘れ得られないのです。捨てられた恨みの男でも其昔のく優しかった人の情は今もなほ忘れる事が出来ないのです。

けれど現在の私は、昔しの様に責任のない若い娘の芳子ではないのです。私には私の仕事があるのです。生活があるのです。謂はゞ自ら背いた一人の男に囚はれて、此の上に心を乱してなるものか。私は余程しつかりせなくては……と自ら心をはげまして居りますのに、余計な浮世の噂の風は、いろくくの事を伝へ来て弱い女の私の心をそゝるのです。

七、音信

つゝ一週間ばかり前の事、私は昔しの其の人の手に書かれた手紙を十八年の久方ぶりで受取りました

十七年以前、私に代へた静子さんは、渡清御問もなくお産のため死んで行かれ、二度目の妻には生別して、今又独身で〇〇の高等学校に教頭を勤めてゐる其の人は、私に一度逢ひ度いと云ふのです。私も実は逢ひたいのです。逢ふて互に昔の夢を語りたひのです。三十幾才の今日まで、斯うして寂しい独身生活をつゞけて来た

のは、決して其の人が恨しいからの事ではない。意地ではない。張りではない。矢張り其の人が恋しいからであつたのです。私は逢ひたい。逢ふて、もう一度昔の様に、手を取つて、私は別れて以来十七年間の私の苦勞を訴へたい。私は昔しの昔しの優しかった彼の人のお胸にすがつて泣いて死に度い。……けれど今日の其の人は、昔しの、私の恋しい人ではゐないであろう……二人の妻を持ち、多少茶屋酒の味も知り、芸者あそびの経験もある今日の其の人と、まだ契りも結ばぬ一人の男を忘れかねて、其の幻の様な思ひ出に若い女の半生を花も飾らず、墨染の有髪尼生活に遂にオールドミスと成りました私との間には、如何なる懸隔が出来てゐる事やら……と思ふと、今更逢ふのも氣遣しい、逢ふて却つて失望する様な事でもあつては、と思へば逢ふのも惜しい。逢はぬのも寂しい……現在、今日の私はまだ其の返事の手紙も書きかねて只迷ひに迷つてゐるのです。さるにしても彼の養神亭の一夜の事件が二人の一生涯をこれ程悲惨に仕様とは実に少女の私は露ばかりも知りません事実でした。

(大正六、八、十二)

- ① 「拗ねた水仙」の本文引用は『法治国』(一九一七・一〇)による。
- ② 『江戸名所花暦』一九一七 吉川弘文館
- ③ 「毛色の変つた女(六) 本郷の狸娘尾崎つね子」『日洋画報』一九一七・一〇
- ④ 前掲「毛色の変つた女(六) 本郷の狸娘尾崎つね子」『日洋画報』

- 一九一・一〇
- ⑤ 黒田源太郎『炉辺夜話』一九三三・一〇
- ⑥ 前掲「毛色の変った女(六) 本郷の狸娘尾崎つね子」『日洋画報』一九一一・一〇
- ⑦ 立花雄一『横山源之助伝——下層社会からの叫び』二〇一五・一〇 日本経済評論社
- ⑧ 遠藤興一「回想の松島正儀(一) …ある評伝の試み」『明治学院大学社会・社会福祉学研究』二〇一〇・三
- ⑨ 前掲 立花雄一『横山源之助伝——下層社会からの叫び』(二〇一五・一〇 日本経済評論社)には、「義母すい方の姻戚の娘松島やいが不義の児を腹にやどして故郷をのがれ、横山家に身をよせその児をうみおとした」とある。
- ⑩ 吉田久一・一番ヶ瀬康子「民間社会事業の中で——松島正儀氏に聞く」『昭和社會事業史への証言』一九八二・一〇 ドメス出版
- ⑪ 前掲 遠藤興一「回想の松島正儀(一)」『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』二〇一〇・三